

The 3rd Annual
Asian Law Students'
Forum
in Seoul 2003

Aug.17th - 23rd, 2003



報告書

alsa

The Asian Law Students' Association

< 目次 >	ページ
実行委員長挨拶	3
開催概要	5
実施プログラム	6
Table Discussion 報告	
[Table B] 囚人の人権と民営刑務所	8
[Table C] 性犯罪者の身上公開	10
[Table D] イラク戦争と国連安全保障理事会	13
[Table E] 移住労働者	15
[Table F] 法律家の倫理と責任	16
Governing Meeting 報告	20
各プログラム報告	
開会式	23
Garden Party	24
ソウル大学ツアー	25
Welcome Dinner	25
Language Class	26
Social Days	26
Kimuchi Museum	27

Cultural Night	28
Debate Competition	30
Symposium	31
Cooking Time	31
General Assembly	33
Cocktail Time	33
閉会式 & Farewell Dinner	34
参加者感想文	35
参加者一覧	43

< 実行委員長挨拶 >

AF2003 日本側実行委員長 守屋栄橘

実行委員長として、私が日本のメンバーを始めとして、全 AF 参加者に問い掛けたかったのは、「ALSA の可能性を語れますか」ということであった。それは、3 度全ての AF に参加した者として言わせていただくと、1 度目は「初めて」であるから衝撃的であり、2 度目は「日本開催」であったから特別。3 度目の今回、一体何人の参加者が ALSA の魅力を自覚できるか……。それが私にとっての実行委員長としての評価のポイントであると考えていた。そしてそれはある程度達成されたと私は考えている、それは各会員のその後のモチベーション、企画の参加率、発言等を通して肌で感じるものであるが、その原因となった要員をいくつかピックアップして分析を加えてみたい。

まず、参加者の意識について、当初から「AF に行きたいです!!」と意気込んでいた参加者もいたこともありポテンシャルを高く感じてはいた一方で、Japan Trip と兼ねる参加者の疲労等も考えると AF へのモチベーションが下がっていないかが心配であった。しかし、三度に渡る事前勉強会での姿勢、直前前宿での皆の頑張りを見るにつけ、「これは!」と思うものが日増しに増えていき、当日の飛行機で多くの一年生が「韓国語参考書」を片手に韓国語を自主的に暗記している姿を見て心を打たれた。これまでの ALSA で考えられないほどの意識の高さである。そして、それは良い形で韓国を中心とする他国の学生に受け入れられ、ALSA JAPAN のメンバーは非常に親切にされ、また歓迎されていたように見える。これだけの意識があれば、AF 中の問題点を問題点としてとらえつつも、良い点を上手く吸いあげることができる。今回のメンバーと一緒に本気で良かったと思う点に、この意識の高さがあげられる。

次に、学術について、これは様々な意見が飛んだ。下級生からは英語力の必要性を自覚する意見が相次ぐ一方で、上級生は質の低下を嘆くものもいた。特に、今回私の「徹底的に準備をきなさい」という言葉を率直に行動に移したものが馬鹿を見る形となり、そこには私としても前もって相手方の実行委員長にいえることも多々あったかもしれないと反省した。その一方で、昨年の AF の際に韓国側から言われた「日本人は余り発言をしていない」とか、「きちんとした意見を言えていない」とか言う声が今回は聞かれなかった点は良いところではあると思うし、同時に昨年の日本の状況が韓国で再来しているのは、彼らの引継ぎが徹底されていないためであると感じる。ここで私が感じたのは、ALSA Japan は ALSA の中では最も古い歴史を持ち、経験も積んできた先進国であるという事実である。私達は、自らが犯した過ちを繰り返すことのないように気をつけるのと同時に、他国が後から後れて同じ悩みを抱えるのを、時には辛抱強く見守ったり、時には手助けできることを伝えたりする努力が必要なのである。それを自覚したメンバーが今回の経験を踏まえて次

回につなげることを祈るものである。

次に、文化紹介について、これまで ALSA Japan は文化紹介を全て即席で、味気ないものをやっていた記憶が私にはあった。当事者はどう思っているのかはともかく、やはり他国の人達が見ていて楽しい発表とは対照的なものが行われていたような気がした。何より、そのことを ALSA JAPAN 内部で公の問題にしたこともなかったように感じる。そんな状態を打破するべく、メンバー内で意見を出し合って、寸劇「水戸黄門」を参加者全員で行うことになり、一ヶ月前から台本作成に入り、前日の合宿でリハーサルまで実施した。勧善懲悪の単純なストーリー、一人一人の個性を生かしたキャスト配置、笑いの要素を取り入れた殺陣のシーンなどで観客を魅了することができたのは何よりであった。当然、あとから「あれでは日本文化は伝わらない」「自分達には日本文化への理解が足りない」という反省の声も聞こえる、しかし客を楽しませるために日本の伝統物語を題材に演技を行い、それで聴衆を楽しませることに成功したことは、十分誇りに思うべきであることだと思う。実際に、「水戸黄門」のあとに、日本のメンバーから空手の披露が行われ日本の古武術の紹介を行うことができたが、真に日本文化を伝えたいなどと言うのであれば普段から相当の準備を行う必要があることはあきらかか、それでは大部分の会員は参加できない。空手が生きたのも、劇があったからこそだと思うので、今後もチームワークと楽しさを日本独自のものができればよいと思う。チームワークの強さも実は日本文化の誇るべき長所である。

最後に、社会見学や、観光名所など、実は事前に調べておけば、今回の企画をずっと面白くさせるチャンスがあったものが多々あった。上記の取り組みはほんの小手調べにすぎず、本来は一つの企画を成功に導くためにはその何百倍もの努力を惜しまぬ気持ちがあってこそではないかと思う。何よりも、やはり ALSA Japan 参加者が、準備の重要性、ALSA Japan の位置付け、ALSA の意義に自覚を持ったことが最大の成果であったと自画自賛している。そして、私個人としても AF 最終日に「I Miss You」と言い、涙を流している他国の友人達の姿を見て、わずかではあったがこの企画に向けて我慢や、無理をしてきた気持ちが晴れ晴れしいものに移り変わっていくのを感じた。同じ経験をした者も多いと信じる。

そんな今回の AF に向けて努力してきた全参加者を称え、そして私が積み残した課題を引き継ぐ、二年生、一年生に向けて先人の言葉を引用して締めくくりたい。

「ローマは一日にしてならず」 事前の努力と 事後の反省が 道を作るのである。

ありがとう。では、また。

< 開催概要 >

日程：2003年8月17日（日）～23日（土）

場所：大韓民国（ソウル）
ソウル女性プラザ

後援：在大韓民国日本国大使館

実行委員長：守屋 栄橘（早稲田大学法学部3年）

参加人数：13名（日本人参加者数のみ）

参加者出身国分布：韓国、日本、タイ、台湾、中国（参加者数順）

<実施プログラム>

8月17日(日)		出発・オリエンテーション
18日(月)	8:00	朝食
	9:00	開会式
	12:00	昼食
	14:00	Table Discussion1
	18:00	Garden Party
	19:30	Free Time
19日(火)	8:00	朝食
	9:00	Table Discussion2
	12:00	昼食
	14:00	Table Discussion3
	18:00	ソウル大学ツアー
	19:00	Welcome Dinner @ソウル大学
	21:30	Language Class
20日(水)	8:00	朝食
	9:00	Table Discussion4
	12:30	昼食 @Nolbunae (韓国式伝統レストラン)
	15:00	Legal Course (韓国商業仲裁委員会)
	16:00	Kimuchi Museum
	18:00	夕食
	20:00	Cultural Night
21日(木)	8:00	朝食
	10:00	Debate Competition Preliminary Round
	12:00	昼食
	15:00	Debate Competition Final Round
	20:00	Free time

22日(金) 8:00 朝食
9:00 Symposium
12:00 昼食 @Tosokcheon(冷麺レストラン)
14:00 Cooking Time
17:30 General Assembly
19:00 Cocktail Time
19:30 閉会式 / Farewell Dinner

23日(土) 帰国



韓国到着@仁川空港

< Table Discussion 報告 >

Table B: Human Rights of Prisoners and the Establishment of Private Prison (囚人の人権と民営刑務所)

日本人参加者：吉尾真貴子（中央大学法学部法律学科3年）

Table Coordinator：Kim, Sang-hyun（韓国）

出身国別参加者数：韓国（6名）、タイ（2名）、中国（1名）、日本（1名）

参加者報告 文責：吉尾真貴子

テーブルの流れ

1日目：

パワーポイントによる、現在の刑務所の実情と民営刑務所設立に関する基本的な論点のレクチャー。その後、刑罰は Retaliation（報復）であるべきか Rectification（更正）であるべきかについてのディスカッション。

2日目：

韓国メンバーから刑務所の民営化に関わる問題点についてプレゼン、それについて全体で議論。

途中で午後からテレビの取材が来ると言う話になり、予定は変更。テレビ取材に向けて論点をつめ、ディスカッションの練習に午前の時間を費やした。ところがテレビ取材は急遽キャンセルになってしまった（>_<）

午後は予定通り映画「Das Experiment（日本名『es』）」を見た。

3日目：

民営刑務所設立に反対派・賛成派に分かれてディスカッション。

個々人の結論、感想を言い合って終了。

テーブル全体の流れとしては、テーブルの構成というものがあまり詰められておらず、その都度 TC が参加者に意見を求めて進行を決めていくということが多かったように思います。そのためなかなか議論に進展がなく、同じような議論を何度も繰り返していました。民営刑務所については、本来さまざまな立場から多くの意見の出るテーマであるはずなので、もう少しテーブルの構成が練られていればより活発な議論ができたのではないかと思います。

しかしテーブルの雰囲気は決して悪くなかったように思います。参加者が自分の意見を発言しやすい雰囲気、ほぼ全員が議論に参加することができていました。特に私は英語力の問題で初日の議論にほとんど付いていけなかったのですが、次の日から TC や韓国のメンバーなどがかなり気を使ってくれ、話をわかりやすく言い直してくれたり、なかなか自

分で意見を言い出せない私に意見を求めてくれたりしてくれました。そのおかげで私は議論に参加することができ、テーブルメンバーと楽しい時間が過ごせたことを大変感謝しています。

Table C: Positing Sexual Offender's Identities (性犯罪者の身上公開)

日本人参加者：高橋和裕（東海大学法学部法律学科3年）

今村紀子（中央大学法学部国際企業関係法学科2年）

Table Coordinator：Lee, Hee-ho（韓国）

出身国別参加者数：韓国（6名）、タイ（2名）、日本（2名）、台湾（1名）

参加者報告 文責：高橋和裕

現在、犯罪者の身上公開は多くの方法で、多くの国々の至る所で実行されている。このセクション中の主要なオブジェクトは、異なる公開制度を含み、各参加者の国の支配力にどのようなものであるかに関して聞く、基礎的な枠組みに関して議論を行った。

総論 公開制度の定義

動機（理由）

各国の事例（ミーガン法等）

- 1) 二重罰（ダブル・ジョパティ）の可能性 システムの問題
- 2) 「より多くの罰」 犯罪者のプライバシーVS知る権利と安全性
- 3) 他の犯罪に対する公正問題(適法性の原理) 上同
- 4) 身上公開の効果

実際、英語で行われたものの、内容的にはそれほど深く突っ込んだと言うものではなかった。

参加者報告 文責：今村紀子

性犯罪者の情報公開制度とは、性犯罪者の個人情報（名前、住所や職業等）を公開することである。Sex offender's notification system (=Community notification system)はアメリカ、カナダ、イギリス（イングランド）、台湾などでも導入されている。アメリカにおいては性犯罪者の情報公開に関して規定する、ミーガン法という法律がある。各国間で制度に若干の差があり、本テーブルで議論をするために制度に関しては予め、その範囲を定めておいた。

情報公開の対象となる犯罪者・・・全ての性犯罪者

重大な性犯罪者（Ex 児童に対する性犯罪）

情報公開の方法・・・・・・・・インターネット

紙による通知（Ex 新聞）

情報公開を与えられる集団・・・・・・・・全国民

性犯罪者が居住する地方自治体の住民

その上で、double jeopardy over punishment equity (effectiveness) に関して賛成派、反対派に分かれて議論を行なった。

double jeopardy に関して反対派は三つの論拠を挙げた。

- ・ 性犯罪者の情報公開システムは、犯罪者の自由を拘束するという刑罰の特徴を備えている
- ・ 一般に対しては犯罪の抑止、犯罪者に対しては再犯を防ぐという刑罰の役割を備えている
- ・ 犯罪者への将来的影響

これに対し賛成派は

- ・ 刑罰とは司法から受けるものであって、性犯罪者の情報公開制度は行政が主体となつて行なうものであるから、刑罰ではない
- ・ 刑罰の目的犯罪者の更生させることなどであり、性犯罪者の情報公開制度の目的は犯罪から国民を守ることなので、その目的が違っており、刑罰とはいえない

over punishment に関して反対派は

- ・ このシステムは性犯罪者の尊厳を傷つけるものである
- ・ 性犯罪者の家族にまでその影響が及ぶ
- ・ すでに刑期を終えた性犯罪者のプライバシー権は最大限保障されるべきである

これに対し、賛成派は

- ・ 性犯罪の再犯は主に被害者が既知の人が多いため、再犯を防げる
- ・ このシステムによって守りうる法益 (= 社会の安全) は大きい
- ・ 性犯罪者の刑期は現在適切な長さではない

equity に関して反対派は

- ・ このシステムは性犯罪者の自由に生きる権利とプライバシー権を侵害する
- ・ このシステムには代替案があるはずである

これに対し賛成派は

- ・ 性犯罪の再犯率は高く、また知人に対する犯罪が多いので、このシステムはかなり有効である

と主張した。

その上で、最終的に代替案について考え、保護観察のように検察官などと定期的に面接を義務付ける、などの代替案がでた。

TC は、Sex offender's notification system は再犯を防止するためには有効であるが、国民全員がその情報にアクセスできるような状況においては、その人権が著しく侵害されるため性犯罪者が居住する地域の住民にだけ情報が知らされるようなシステムが、最もその

効果は保ちつつ人権侵害を最小限に押さえられるので良いと述べていた。

私自身の意見としては、性犯罪者の情報公開制度は、その公開の方法（例えばインターネットを使って情報を配信するのではなく、地域住民のみに知らせる）によりその人権侵害の程度を緩和することができ、地域住民の安全も守ることができると思う。

Table D: The Iraqi War and the UN Security Council (イラク戦争

と国連安全保障理事会)

日本人参加者：岸本康太郎（早稲田大学法学部 3 年）

染野好美（東京国際大学国際関係学部国際関係学科 3 年）

Table Coordinator：Ahn, Hongik（韓国）

出身国別参加者数：韓国（7 名）、日本（2 名）、タイ（1 名）、台湾（1 名）

参加者報告 文責：染野好美

みんなで楽しく交流

ディベートのみんなとは他の交流の時間でも話す機会が多く、仲良くなった人が多かった。ディベートの休憩時間にはみんなで写真をとったり、自国から持ってきたおみやげを渡したりして盛り上がった。私が日本から持っていった葛飾北斎の富嶽三十六景の絵はがきも喜んでもらった

ディベートの時間に意見を言いあい、お互いに理解し合うということを通して私たちはすっかりうち解けあっていた。最終日のディベートの休憩時間には、これから行く場所の話で盛り上がったり昨日の話で盛り上がったりしていた。なかでもウサギの肉を食べることができるお店の話は興味深かった。韓国では常食ではないが、ウサギの肉も食べるそう。また、これはあとで知ったことだが、犬の肉も食べる。犬の肉を料理として出しているレストランのそばを通りかかったときに教えてもらった。

ディベート

このテーブルでは、イラク戦争について各国の学生が自分たちの国の立場からイラク戦争をどのようにとらえているのか、自分たちの国がどのようにイラク戦争に関わっているのかについて報告し、それらの情報から世界情勢をとらえこれからの国連のあり方について話し合った。

テーブルのメンバーはフォーラム開催国の韓国から 7 人、台湾、タイからそれぞれ 1 人、日本から 2 人。そして、これら発言者の意見をまとめディベートを進めていく役割を担うテーブルコーディネーター 1 人（韓国）の合計 12 人である。

ディベートの時間の中に、イラク戦争の時それぞれの国がどのような状態におかれていたのか、戦争には賛成であったのか反対であったのかについての発表もあった。その中で台湾は中国との関係について触れていた。サーズの時も WHO 加盟などで問題になった。このテーブルに中国からの参加者がいれば双方の意見を聞くことができさらにおもしろいテーブルになったのだろう。

ディベートを行ったのは3日間という短い期間だったが、各人の意見の交換や日本人同士では当然でてこない各国の立場にたつての話し合いができた。また、A Fのディベートでは国境を越えた友達ができる。しかも表面的な付き合いではなく、まじめな話ができる深い関係の友達だ。実際A Fが終わった後もメールなどで連絡を取っている。楽しくて中身のあるA Fにもう一度参加したい。

Table E: Migrant Workers (移住労働者)

日本人参加者：井手健介（中央大学法学部政治学科 2 年）

Table Coordinator：Lee, Hae-min（韓国）

出身国別参加者数：韓国（5 名）、タイ（3 名）、日本（1 名）

参加者報告 文責：井手健介

1980年代の後半からグローバル化の流れによって、世界大で移住労働者の数が増大するようになった。このテーブルのテーマは、そのような移民労働者に対して、どこまで彼らの権利（基本的人権、生存権、労働権など）を認められるかということであり、また、それを法的観点からみるとどうなのかということであった。なお、自分がこのテーブルに配置されることになったのを知ったのが本番前夜だった為、テーブル中はあくまで自分の推測に基づいて意見を述べなくてはならなかった。

テーブルの流れとしては、まずは1日目に韓国の移住労働者に関するドキュメンタリービデオを觀賞して、その後に、簡単な意見交換を行い、2日目には、まず各国ごとの現状についてのプレゼン、その後、そもそも人権とは何か、国家は移住者に対してどこまで人権を認めるべきなのかという観点についてディスカッションを行った。次に、実際の韓国で行われている政策や、NGOの活動、また、国際法的観点からみた移住労働者の権利についての紹介があったらしいが、自分はガバニングミーティング出席の為に参加できなかった。最終日には、それぞれが、それぞれの国の政策提言者となって、現状の問題点とその政策方法についてのプレゼンテーションを行った。

振り返ってみると、そこまでレベルの高い議論が交わされたという感想はなく、準備の遅れの為か、どの参加者も十分な準備を行えなかったようであった。しかし、特にタイ人を中心とする参加者の高い英語力や、基本的人権に関するディスカッションなどは、自分にとって刺激を与えられる場面でもあった。

自分としては、基本的な自分の意見は言えたが、内容に乏しく、また、ディスカッションの場面では、もっと積極的に関わっていったのではないかと思える場面が多々あったのが心残りである。特に、今回はタイの参加者がただけに、まったく違った視点を聞けるチャンスがあったのにも関わらず、それを逃してしまったのはもったいない限りである。

これは、ディベート大会に出て一番思ったことでもあるが、まだ基本的学術能力、そしてそれを伝える英語力に向上の余地が十分あることを思い知らされたといえる。それが、今回のAFでの一番の成果であろう。

Table F: The Ethics and the Responsibilities of the Lawyers (法律

家の倫理と責任)

日本人参加者：石橋瞬人（中央大学法学部国際企業関係法学科 1 年）

恩田晃一（中央大学法学部国際企業関係法学科 1 年）

野村洋介（早稲田大学法学部 1 年）

星野公哉（中央大学法学部国際企業関係法学科 1 年）

牟田 努（早稲田大学法学部 1 年）

Table Coordinator：Jee, Hyun- Young（韓国）

出身国別参加者数：韓国（5 名）日本（5 名）

参加者報告 文責：石橋瞬人

事前勉強でカバーしなかった内容がテーブルで多くでてきたため、苦労した。色んなケースをとりあげて、それについてはどう思うか、というような事前勉強を多くしたが、テーブルではあまりそういった議論にまで達せず、基本的な法律家のシステム等について多くの時間を割いた。事前に何について話しあうのか企画書の段階で知らせて欲しかった。テーマについての勉強をしぼりすぎていたのかもしれない。もっと色んな視点から見ておくと良かったかもしれない。

基本的にテーブルはあまりスムーズに進まなかった。そしてテーマについて深く議論するというレベルまで発展する事も無かった。この理由として、レジュメが無かった、という点と、英語力の低さ、があったと思います。レジュメが無く、ホワイトボードも無く、全てを話が流れるままにしていたから話がどンドンズれてしまい、途中から混乱してしまった。途中からホワイトボードが出てきて助かったが、できれば初めからレジュメか、何かしら流れがわかるようなものが欲しかった。

それと英語力、特にお互いを理解する力が不足していたため、話の流れがおかしくなり、議論がすすまなかった。全体としてあまり議論が行われなく、皆が少し意見を言って、TC がまとめて終わりというような内容になってしまったと思う。だがホワイトボードがきた時から少しずつ議論ができるようになり、最終的には意見をまとめる事ができた。

参加者報告 文責：恩田晃一

構成員：＜韓国＞キョン(日本の Care Taker)、クール、スー(Cultural night で司会していた女の子)、スーア(A C)、ユンギョン、ユミ(日本の代表のマニト)、レイニー(T C)

＜日本＞石橋瞬人、恩田晃一、野村洋介、星野公哉、牟田努

初日(14:00~17:30)

- 午前中に行われた Opening Ceremony のあとに T C が A F 参加者全員を対象としたアンケートを実施しました。アンケートは「法律家の地位についてどう思うか」という五択の似たような質問が 10 問くらいだったと思いますが、あのアンケートがあとのテーブルの進行にどう影響したのかは定かではありません(笑)自分の理解力の問題かも知れませんが...
- 韓日の法曹三者の倫理が問われるケースを T C から聞かれて、韓国は「大企業(SUMSUNG とされる)の裁判官の買収」を提示し、日本は「企業内弁護士の守秘義務と真実義務」「死刑が間違いない被告人の弁護」を提示しました。前者は個人的に勉強して、後者は事前勉強会でオウム真理教をネタに発表をやらせていただいていたので、「よし、来い!」と思っていたけど結局たいしたこと言えずテーブルは何事もなかったかのように進行していきました。英語って大事です。
- Ice Braking として「名前覚えゲーム」をやって、それを失敗した罰ゲームとして韓国側はレイニーが韓国民謡を歌い、クールは物乞いのダンス(?)を踊っていました。日本側はみんなで(本当は瞬人一人の罰なのに!)阿波踊りを踊りました。

二日目(9:00~12:00、14:00~17:00)

- 韓日の倫理教育の現状を提示した後、弁護士倫理の問われたケースとして O . J シン普森のケースをさらいました。日本の星野は Japan Trip でこのトピックを勉強したらしく、テーブルのみんなに説明してくれてとてもかっこよかったです。ちなみに日本の大学には倫理のコースはありませんが、ソウル大にはあるそうです。しかし内容はつまらないらしく講義はみんな寝ているのだとか(キョン談)。
- 法曹三者になるまでの過程を韓・中・日とアメリカの間で比較しました。

三日目(9:00~12:00)

[How to make an Ethical attorney/judges/law students]を話し合った後、弁護士の数についてそれぞれ意見を述べ、最後 T C が「法とは何か」という質問をしました。

参加者報告 文責：野村洋介

私たちのテーブルは“法律家の倫理と責任”というテーマで討論を行った。テーブル参加者は全員 1 年生で、韓国人 5 名、日本人 5 人からなっていた。初日、緊張をほぐすため、自己紹介と簡単なゲームを行い、議論に入った。

主なトピックとしては

- ・ “法律家”の定義
- ・ 各国での法律家を取りまく現状、問題となっている事態
- ・ 倫理とはなにか？
- ・ 具体的に倫理が問題となっているケース(企業の不正を知った企業内弁護士の立場、O.J. シンプソンの事件等)
- ・ 倫理的な裁判官・検察官・弁護士をつくるにはどうすればいいのか
- ・ 倫理教育の方法、教育制度
- ・ 法とはなにか

などについて話しあった。

良い点としては一年生テーブルということで、比較的簡単に発言をする機会が得られたことや、制度が比較的似ている日韓のみによるテーブルであったため、互いの国に特有の現象も理解しやすかったことなどがあげられる。

しかし、テーマが非常に抽象的(知識のない一年生のテーブルなのでやむをえないと思う)であったため、双方の事前勉強が必ずしも一致しておらず、事前に用意したことが 100% 発揮されたわけではなかった。

また、レジュメがなかった為に、全体像を把握しにくく、TC が一生懸命説明してくれたが、参加者間の議論というよりは TC を介した各参加者の意見表明になりがちであった。一年生に特有の現象としては、まだテーブルの経験も浅く、知識もあまりないため、議論が行き詰ったときにどう話題を転換するのかといったことがわからず、TC の負担を増やしてしまったこと、また根本的な問題なのだが英語力不足により自分の考えをうまく伝えられないなどが目立った。しかし一年生テーブルは今回が初めての試みであり、今回の反省点をいかに次回につなげるかということが最も重要であろう。

対策としては、

- ・ 双方で事前に連絡をとりあいながら準備を十分に行うこと
- ・ その際できるだけ争点を具体的にし、本番で議論がかみ合うようにすること
- ・ ガイドラインとして全体像を把握するためにレジュメを用意すること
- ・ 上級生のオブザーバーをつけ議論を方向づけてもらうこと(TC の負担を減らす)

などが考えられる。

実に得るものの多いテーブルになったと思う。参加者全員に心を配り、最後まで知識のない一年生を引っ張ってくれた TC と AC に心から感謝をしたい。

参加者報告 文責：星野公哉

このテーブルは TC のみ上級生で、参加者が 1 年生だけで構成され、私たちは法律家とは何か、法律家の倫理問題はそれぞれの国で深刻な問題なのか、倫理教育はどうすべきか、どのように倫理的な法律家を作るか、などを議論した。

AF に行く約 2 ヶ月前にテーブルの議題が決まり、事前勉強会を通して法律家やその倫理、責任についてそれなりに学んできたものの、非常に難しく答えの出しづらいテーマであると同時に、年に 1 度の ALSA の最も大きな行事の一つである AF での A.A.に参加するという意識から、高度なディスカッションになることを予想し恐怖にも似た思いを抱いていた。

しかし、実際には TC の準備不足とテーブル運営に戸惑うといった感じで、予想を覆される内容だった。一方で自分自身への課題や日本メンバーとの連帯感といったような、このテーブルに参加したからこそ見えてきたといえるメリットがあった。まず自分自身への課題だ。AF に行く以前から英語力に対して不安を持っていたが、それは英語を話すことに対する不安ではなかった。ところが実際に参加してみて TC や参加者の話していることを誤って理解していることが多々あることに気がついた。この点については本当にショックだったが、同時に英語に対するモチベーションを格段にあげる良いきっかけとなった。

次に日本メンバーとの連帯感。初日のディスカッションが終わった後、テーブルに参加した 1 年生が次の日以降のテーブルを心配し、参加者として何ができるのか、どうすべきか、事前勉強会で何が足りなかったかなどを真剣に話し合った。また学術統括の今村さんが、立場上の責任があったにせよ、1 年生テーブルを心配してくれ、改善に向け手をうってくれたことにも連帯感を感じたし、今後、協力しあうことで困難な事態にも対処していけるという希望を持つことができた。

最後に、まず普段真剣に考えることのない難しい内容のディスカッションの場を提供してくれた TC、AC に感謝すると同時に、TC 側の意図をしっかりと理解できなかった自分の理解力不足、英語力不足を謝りたい。次に学術統括の今村さんにも事前勉強会から本番を通して大きな助けとなってくれたことに感謝したいのと同時に、様々な迷惑をかけ精神的にも肉体的にも大きな負担をかけてしまったことを謝りたい。

AF メンバーのみなさん、とくに守屋さんありがとうございました。そしてお疲れ様でした。本当に感謝しています。それから恩ちゃん、瞬人、ノム、ツトム、ありがとう。これからもよろしく！

< Governing Meeting 報告 >

文責：2003 年度 ALSA JAPAN 代表 守屋 栄橘

まず、代表会出席国は ALSA Japan 代表である私、守屋 栄橘のほか、ホスト国の ALSA Korea 代表の Kim Hyun Jee さん、ALSA China 代表代理の Sun Jiaxu さん、ALSA Taiwan 代表の Tsai, Hsing-Chuan さん、今年 10 月に ALSA と合併予定の ASEAN 法学生協会 Thailand 代表の Wong Inmeng さんが出席して行われた。前回の Tokyo Agreement 締結国のうち、Hong Kong 以外は全て参加することができた。

今回の The Third Asian Law Students' Forum の代表者会議では、去年の Asian Law Students' Forum で締結した Tokyo Agreement に基づいて、ALSA の国際レベルの機関をいかに構成するのか？について、話し合われた。まず、各国の現状分析を行うため、年次活動報告を行った後に、将来の ALSA の機構についての話し合いに入った。

その冒頭にて、ALSA JAPAN が考える、国際レベル・国家レベル・地域レベルの全てをそろえた理想図である ALSA International Network 構想について、私がスピーチを行い、各国から賛同を得ることができた。ALSA International Network 構想は、日本側で半年以上かけて練ってきた原案であり、それを会議 2 週間前あたりに各国の代表者宛てにメールで配信していたこともあって、今回の会議のベースとすることができた。

次に、ALSA JAPAN、TAIWAN などの要望により、「なぜ、ALSA に国際レベルの機構を設けるのか？」を、各国と話し合うために、前回の Tokyo Agreement に記載されている、理念、目的、手段を確認した後に、ALSA の国際レベルの機構（以下 ALSA International Board と表記）の機能、構成、各国レベルの機構（以下 ALSA National Boards と表記）との関係、が今回の具体的な議題として承認された。

その後、15 時間ほどのディスカッションが行われ、機能、構成については合意が達成された。その主な内容は以下のとおりであり、ソウル Agreement として記載されている。

具体的に今回合意できたことは、

- ・ ALSA International Board の役割として
 - 1 年次計画を立てること
 - 2 前年度の評価を行うことと、各国のボード管理を行うこととし
- ・ ALSA International Board の構成として
代表、事務総長、AA 担当責任者、PR 担当責任者、財務統括を置くことになりました。

- ・代表の職務として
 - 1 全ての海外企画の監督
 - 2 各国のボードの監督
 - 3 ALSA 全体と ALSA 外との渉外業務
- ・事務総長の職務として
 - 1 情報の管理
 - 2 ホームページ管理
- ・財務統括の職務として
 - 1 財政管理
 - 2 予算作成
 - 3 前年度の財務の評価
- ・PR 担当責任者の職務として
 - 1 スポンサーの獲得
 - 2 各国ボードの学生獲得戦略などの情報管理
- ・AA 担当責任者の職務として
 - 1 International 企画の年次主要テーマの作成と 目標の作成
 - 2 テーマに関する評価を行うこと
 - 3 各国ボードの学術の状況に関する情報管理
 - 4 各国で現状で話題になっている、最新の法律テーマの共有化

- ・今後の予定としては、10月21日からタイにて行われる ASEAN CONFERENCE にて、
 - 1 ALSA National Boards と ALSA International Board の関係
 - 2 ALSA International Board の選出方法
 - 3 ALSA 年次企画の計画
 - 4 実際の ALSA International Board の選出（時期など）
 を議題として話し合うことが合意されました。

・対立点

副代表の設置について、ASEAN、韓国と日本で副代表像が違っていたため、議論が分かれた。

ASEAN 韓国案：
代表と情報や考え方を共有できる人間を副代表としておき、代表の職務を全般的に補佐する。

日本案：
専門分野（学術、広報など）を持ち、一定の職務を必ず行う上で代表を補佐するような副代表を置くべき。



利点：

代表が試験期間中等で職務執行が困難な場合に代行をする際に、その正統性が日本案より高い。(全てを代表と共有している分だけ)

批判：

今すぐに、必要であるほど代表業務が忙しくなるかは、分からない。副代表を置いたものの、やることがない場合もありうる。

利点：

明確な職務を追っているため、必ずやることがある。それぞれの専門分野を担当する際にも、代表との意思の疎通は必須であるため、適役。

批判：

専門分野の担当者とは、あくまで特定の分野のスペシャリストであって、代表代行を行うだけの正統性を得ない。



結論： 日本としては、早期に専門分野の担当者が International Board に置かれることを、重視したいので(それが副代表となるべきか?は次のレベルの話) 各国に専門分野担当者の設置を確約させることで、副代表像については ASEAN・韓国と同調することにした。一方、ASEAN、韓国も副代表の現状における設置の必要性を説明しきれなかったため、今後3年間協議し、4年後以降に設置の是非を検討するという。

また、AA 担当者の国際的企画 AA の評価については、日本側が第三者や第三者機関からの評価を受けることを強く求めたのに対して、それを覚書として、AA 担当者決まったときに守るように呼びかける一文を加えました。



Seoul Agreement 調印後の各国代表者たち

<各プログラム報告>

・開会式 文責：牟田努

第三回アジアンフォーラムの開会の印として、オープニングセレモニーが行われました。アジアンフォーラムはアジア法学生協会の学生自らの手で開催したものにもかかわらず、非常にしっかりとした大会でした。そして、オープニングセレモニーはアジアンフォーラムのフォーマルな雰囲気を象徴したものであると言えるでしょう。日本、韓国、中国、台湾、タイの学生は皆スーツを着てこのオープニングセレモニーに参加しました。さらに、舞台の天井からは、「Asian Law Students' Forum」と書かれた横断幕が吊るされており、会場のフォーマルな雰囲気をいっそう引き立てていました。オープニングセレモニーの時点では、まだそれぞれ、外国の学生と交流がありません。ですから、皆緊張した顔つきで、各国ごとにかたまって席についていました。



オープニングセレモニーは韓国の学生の司会進行により始められました。もちろん言語は英語が使われ、その英語力の高さに驚かされました。まずは、ALSA Korea 代表のスピーチがなされ、次に、各国 ALSA 代表がスピーチをしていきました。そのスピーチでは誰もが、アジア法学生同士の理解と協調の必要性を説き、このアジアンフォーラムのようなアジアの学生が集まれる場の重要性を主張しました。

スピーチが終わり休憩となると、堅苦しい雰囲気は一転して、はじめての国際交流が始まりました。どの国の学生も、事前に用意しておいたネームカードを持ち、外国の学生に話しかけはじめました。最初は英語で話すことに戸惑い、照れていましたが、自分の意思を伝えるために皆一生懸命話していました。そして、ついに国際交流をしているのだという実感が湧いてきて、興奮していました。この休憩が終わるころには、うまく英語が話せて自信をつけた人も、なかなか言いたいことが通じず苦労していた人も、緊張がとけていたようです。

スピーチが終わり休憩となると、堅苦しい雰囲気は一転して、はじめての国際交流が始まりました。どの国の学生も、事前に用意しておいたネームカードを持ち、外国の学生に話しかけはじめました。最初は英語で話すことに戸惑い、照れていましたが、自分の意思を伝えるために皆一生懸命話していました。そして、ついに国際交流をしているのだという実感が湧いてきて、興奮していました。この休憩が終わるころには、うまく英語が話せて自信をつけた人も、なかなか言いたいことが通じず苦労していた人も、緊張がとけていたようです。

休憩後の後半は、各テーブルコーディネーターによって、これから始まるテーブルディスカッションの概要説明がなされました。このことで、ALSA はただの国際交流を楽しむ団体ではなく、学術を通して交流をさらに深めていく団体であることを認識させられました。

このようにして、オープニングセレモニーは閉会して、韓国での五日間のアジアンフォーラムが始まりました。

・ Garden Party 文責：守屋栄橘

開会式が行われた日の夕方、The Asian Law Students' Forum では、毎回、ウェルカムパーティーというものが行われる。正装をして、お洒落なグラスにワインを入れて、各国の参加者と、自己紹介やお国自慢や、真面目な法律トークなどを楽しむのが恒例であるのであるが、今回は一味違う。そう、題名にあるとおり、もっとフランクに楽しもう！！とガーデンパーティーという BBQ パーティが企画されていたのだ。

だが、あいにく天気は雨。雨では BBQ はできない。仕方がないので、室内のホールでバイキング形式の立食パーティーを行うこととなった。高校の体育館よりも広いぐらいの大きさのホールに、肉、魚などがならび、各テーブルにはビールも置かれ、結局お洒落な室内パーティーとなった。先日、日本で行われた Japan Trip（日韓の二国間交流企画）で知り合った何人かの ALSA 韓国の仲間ともこのパーティーで会うことができ、ALSA のネットワークが人的な部分でますます深化していることを感じた。

これからの議論を戦わせ、お互いに意見交換をする日々を健闘しあい、私達は楽しい夕食の一時を楽しむことができた。



・ソウル大学ツアー 文責：高橋和裕

ソウル国立大学内を30分位見学予定であったが、雨天により止むを得ずツアーは中止になったが、法学部100周年記念ホールで同大学法学部長のKyung-hwan Ahn氏による、未来を担う、法学生に対するスピーチが行われた。その後、参加者全員で記念撮影。



参加者全員での記念撮影@ソウル大学

・Welcome Dinner 文責：吉尾真貴子

Welcome Dinnerは2日目の19日の夜にソウル大学で行われた。ソウル大学の法学教育記念館で、ソウル大学法学部長のAhn Kyung-hwan氏によるスピーチを頂いた後、バスで大学構内を移動し、約10分後パーティーの会場となる大学内のディナーホールに到着した。

パーティーはまず、法学部長のAhn Kyung-hwan氏から「みなさんと一緒に楽しい時間をすごしたいと思います」というような内容の短い挨拶をいただいてから始まった。

会場のディナーホールには正直驚いた。大学内にディナーホールがあるということでも少し驚いていたけども、まあ所詮大学内で行われるパーティーだからとタカをくくっていた。しかし、ソウル大学のディナーホールにはきれいな照明や大きな窓などがあり、食事もおいしくて、とても大学の施設の一つとは思えないようなホールだった。少なくとも私の通う中央大学ではパーティーを開けるような施設はない...(早稲田はどうか知らないけど)。それだけソウル大学の規模の大きさや格の高さを感じた。

私たち参加者は始めのうち、パーティーが始まってからも自分のマニトと話している人が多かった。この日の移動時間中、ずっとマニトと行動するようになっていたからだろう。

この頃にはもう、ほとんどのマニト同士はかなり親密になっていた。ただ、全体的に少しマニトとばかり接しすぎているのではないか、というような状況もみられた。しかしこのパーティーの時間が進むにつれ、次第に参加者はマニト以外の人とも交流するようになった。この場でまた交流の輪が広がったように思う。

立食形式のディナーだったので、各自が思い思いに食事をしたり話したり写真撮影をしたりしている間に、あっという間に約 90 分のパーティーの時間は終わった。

私たちをソウル大学に招いてくださり、ディナーホールでの素晴らしい時間を提供してくださった Ahn Kyung-hwan 氏に感謝したいと思う。

• Language Class 文責：石橋瞬人

ここでは、基本的な韓国語の単語と、韓国語の読み方を習った。外国人の両隣には韓国人が付き、質問があればその人に聞くというやり方だった。雰囲気はおもしろく、笑いを含めて楽しく司会の二人が教えてくれたので飽きることもなく、単語も実用性のあるものや、使っておもしろいものをコント等を使って教えてくれた。

韓国語は構成が日本語とほとんど同じなので、日本人にとって、韓国語を理解するのは他の外国人より楽だったのではないかと思う。特に何人かは事前に勉強していたので、このクラスはわかりやすかったのではないか。

韓国語の読み方を勉強し、表と時間があれば読めるようになるよう、資料も配られ、読み方、書き方を教えてくれた。単語は、次の日のフリータイムのショッピングで使える「いくらですか?」「高い」「安くしてください」を参加者が司会者と会話をするシチュエーションを作り、教えてくれた。

他には基本的な「こんにちは」「ごめんなさい」等のあいさつを学び、クラスの最後には自分の名前を韓国語で書いて終了した。

• Legal Course 文責：野村洋介

8月20日(水)に Legal Course (社会見学)がソウル市内の韓国ワールドトレードセンター43階、The Korean Commercial Arbitration Board (KCAB)の事務所で行われた。このThe Korean Commercial Arbitration Board (KCAB)は国際企業あるいは韓国企業間における様々な法律的な論争を仲裁することを目的とした韓国で唯一の組織である。22カ国と仲裁に関するアグリーメントを結び、23の海外の仲裁団体と提携して紛争を解決している。ちなみに昨年度の仲裁件数は210件で、金額は2億6千万ドルにものぼった。

まず各国の学生は実際の仲裁を行う部屋に通され、そこで KCAB の構造、特徴、実際の仕事などについて英語による説明を受けた。一通りの説明の後、学生の側から、「調停はどのくらいの確率で失敗に終わるのか?」という質問がでたが、回答は「仲裁の決定は法的

な拘束力をもっており、依頼者もその法的拘束力を頼りにして依頼しに来るため、失敗はほとんどない」というものだった。連日の過密ぎみな日程により、居眠りをする人が多かったのが少し残念だった。

この法律による仲裁はまさに“法律家”によって行われるプロの仕事であり、今回見学できたことは将来涉外弁護士を目指す人だけでなく、国際的な仕事にかかわりたいと考える人にとって貴重な経験となったのではないだろうか。このような機会をつくってくれた韓国の人たちに感謝したい。

・ Kimuchi Museum 文責：染野好美

韓国といえばキムチ！世界でも有名なキムチは辛くて有名だけど、実は唐辛子がはいったのは朝鮮時代中期のこと。つい最近！！身近だけど実はよく知らないキムチについて調べることができるのがここ、キムチ博物館。いざ、キムチワールドへキムチを食べに行こう！！

キムチ博物館に入ると、初めはキムチの歴史についての展示や資料が並んでいる。みんな唐辛子が入ったのがいつ頃か、と調べ始めるのかと思ったらカメラ使用可能のキムチ博物館の中で写真撮影が開始された。実物大の壺に入っているキムチをとったり、キムチ料理の展示品と食べたそうにしている姿で撮ったり・・・。

そのようにして楽しみながら、みんなキムチの種類やキムチを作る課程をわかりやすく説明している小さな人形などをみてキムチについて学んでいた。

キムチの歴史、種類、製造と貯蔵方法のコーナーが終わると今度はキムチの味と栄養についての展示がある。こちらは文字による展示が多い。もちろんハングルで書かれているため私たちは読めない。歴史や種類など、このコーナーに来るまでは説明をしてくれていた韓国の友達も、両側に説明文が展示されている長い通路を進んでいる間は訳そうとする意欲もわかかなかつらしく足早に過ぎていった。

そしてお次は試食コーナー！キムチ博物館にキムチを食べに行こうと文頭で言ったとき、ジョークだと思った人も多いかもしれない。しかし、ここでは本当に食べられる！！たいていは人が並んでいるらしいのですぐには食べられない。私がお場に行ったときも大人、子供併せて数人並んでいた。キムチが置いてあるガラス張りの別室の中には兄弟らしい子供が2人だけキムチに選ばれたかのように入っていて、厳かに試食をしていた。

最後に大きな地図に韓国のキムチ輸出対象国が展示されているのを見て博物館の入り口に戻ってくる。もう一周しようと思えばできる構造だ。入り口に戻ってきた私の目に、子供がスタンプラリーのようなものをやっているのをみてもう一度回ってこようかと思った(笑)よく見ると入場券には丸いマスがいくつかあった。そこにスタンプを押すらしい。1つ発見するのが難しいスタンプがあるらしいので、次のA Fで行く機会があれば韓国の友達と競争してみるのもいいのでは？

・ Cultural Night 文責：黒石真那実

プログラム順

1. 中国
太極拳：陰から陽、陽から陰の力へと変換させるように、ゆるやかな円を描く動作が主だった。
2. 台湾・中国
歌：伝統的な歌を3曲披露。中国にも台湾にも共通する歌らしい。
3. 韓国
Tekkyong：テコンドーから派生した、韓国の伝統スポーツ。テコンドーのように、戦うことを目的とするよりは、楽しむ為の競技として作られた。
4. タイ
民族衣装を纏ってダンス：Pops を見事に Lip Sync しつつ、独特の動きを披露してくれた。また、おなじタイ国内でも、地方によって衣装も大分違っていた。紹介されたのは、東北部(ラオスの衣装と似ている。タイの方が、丈が膝上位で短い)、中央部、東部、そして南部(マレーシアの文化に影響されている)の4地方の服。きらびやかな衣装に、皆注目した。
5. 韓国
伝統衣装の紹介：1600年代からの李氏朝鮮で着られていた平民・警察官・警察署長・両班・大臣・天皇と皇后の衣装の紹介。普段見られない姿に、韓国人も驚いていた。
6. 日本
劇(水戸黄門)：伝統...と言えるかどうかは定かではないが、お年寄に大人気の国民的TVドラマを再現。
空手の紹介：日本の武道として紹介。形と言って、1つ1つの動きに意味のある演武を披露。
7. 韓国
プロの演奏家 Han Chung Eun が、竹で作られた韓国の伝統の楽器「ダンソ」(小さい方)と「デグム」(大きい方)で5曲を華麗に演奏。1曲目の「Chong-song-gok」はキーの高い、しかし落ち着いた静かな曲。2番目の「Sang-riong-sahn」は、デグムの低く力強い音で奏でられた。3番目の「Sinawe」は、韓国の代表的な民族歌であるようだ。4番目の「Morning」という曲は、彼自身の作品で、綺麗なメロディーが印象的だった。最後の「Arirang」は韓国で有名な曲の1つで、ALSA-Korea の Hee Ho が彼の演奏に合わせてステージで歌ってくれた。また、エキストラとして ALSA-Japan の今村と Thailand の Marina がステージで一緒に歌った。頭に入りやすいメロディーだったので、みんなでこの歌を歌った。

まさか、水戸黄門がここまで大ウケするなんて！

話そのものがウケたわけではないと思う。決して「伝統」文化とは言えないが、日本国民なら誰でも知っている「水戸黄門」をただ紹介するだけなら、翻訳を付け加えた字幕 VTR を見せるだけでも良かったのだから。つまり、各国の参加者と知り合った私達自身が何らかの役を持って為したことが、各国のウケにつながったのだと確信している。配役然り、エフェクト係然り...それぞれが考えた独自のアクションや音楽効果やタイミングは、TV の水戸黄門では味わえないおかしさであり、もちろん本物の「水戸黄門」からは外れた部分も多々ある。しかし、「日本ではこんなドラマやっているんですよ」という事を知ってもらい、そして大いに笑って満足して頂けたのだから、これはこれで大成功だと思っている。というのは、cultural night の後、多くの人が日本の事を口々に話題にしていたからだ。事実、AF が終わった今もコメディアンとして君臨した人もいる位である。一緒に韓国へ行くことは出来なかったが、この劇の土台となったシナリオを作り、そして翻訳にあたってくれた岸君に感謝の意を表します。本当にどうもありがとう！

留学して初めて自己の日本文化に対する無知を感じ、空手を習う事を決意したが、ALSA ほど披露の機会を与えられた事はない。演武の度に外国の方々に、日本の事を少しでも分かっていたただけだろうかという気持ちになる。そして、向こうが喜んでくれる度、また演武したいという気持ちに駆られる。空手を始めて、良かった。



太極拳



Tekkyong



タイによるパフォーマンス



韓国の伝統衣装の紹介

・ Debate Competition 文責：星野公哉

方法：Affirmative・Opposite チームそれぞれが、下記の順に審査員の前で意見を主張。

- 1 . Opening Statement (2 min, A O)
- 2 . Main Argument (4 min, A O)
- 3 . Questioning (2 min, O) Responds (3 min, A)
- 4 . Questioning (2 min, A) Responds (3 min, O)
- 5 . Closing Statement (2 min, A O)

判定：2～3人の審査員が見学者に配られた評価シートを考慮に入れ、判定。

* 評価シート・・・上記「方法」に書かれている各点ごとに5段階評価+コメント

参加者：6チーム12名(各国1チーム、日本2チーム)

第1ラウンド

争点：Morning after pills are new form of abortion

台湾(A) vs 日本(O) (今村、瞬人)、タイ(A) vs 中国(O)、日本(A) (井手、黒石) vs 韓国(O)

日本：科学的に受精卵が着床後に生命と定義されている。→着床前に使用する Morning after pill は中絶ではない。

台湾：・受精卵の時点で生命といえる。

・他の避妊薬を選ぶことも可能だった。

ファイナルラウンド

争点：Installation of CCTV is against human rights

日本(A)(今村、瞬人) vs 中国(O)

日本：・CCTV 急速に発展 法律の整備が追いつかない

例：・どれほどの技術を CCTV に使用していいのか

・使用法を明確に定める法規定がない

・イギリスの調査・・・犯罪率低下していない

・CCTV はテロ防止のために導入されたが実際にアメリカで効果が出ていない

中国：犯罪の抑止力 公共の利益>人権

結果：優勝...中国、準優勝...日本



AF 最終日のミーティングで日本メンバー、特に1年生の間からモチベーション向上につながる貴重な経験だったといった感想がでた。同時に本番直前に論点が発表されるため参加者の準備不足はもちろん、見学する側も専門用語が分からず退屈であったとの感想もでた。また参加者からは、第1ラウンド勝者が全て Opposite チームであったことから、どちらかが有利になることのないテーマ設定をすべきだとの意見もでた。

評価シートの活用のされかたや判定の基準など改善すべき点もあったが、今後、LG や企画などでやってみる価値は十分あると思う。

・ Symposium 文責：井手健介

テーマ：North Korean Nuclear Heads and Peace on the Korean Peninsula

講師：Mr. Lee Seung Yong (Good Friends)

内容：今回のシンポジウムのテーマは、北朝鮮に関わる問題であった。北朝鮮の現状や核問題、それに関わる国際関係、そして、北朝鮮国内の国民の人権や難民問題について、人権団体 ”Good Friends for Peace, Human Rights & Refugees”から講師を招いて行われた。

まず、先生は団体の設立過程の話と、北朝鮮の最近10年の動向についての流れを簡単に説明して下さった。その中で、特に強調されていたのが人民の現状はどのようなのかということと、彼らが何を求めていたのかということであった。その次に、北朝鮮の核問題の背景とそれをめぐる各国（米・韓・日・中・露）の対応について一つ一つ説明して下さり、最後に、朝鮮半島の平和を守ることの大切さと、どのようにして向き合っていくべきかについてお話して下さった。そこで先生が強調されていたのが、いかに政府が危険であろうとも、そこには多くの人が飢餓で苦しんでいるわけであり、我々はまず先に、そのことに取り組んでいかなければならないということだった。

その後、質疑応答の時間を取ったが、誰からも質問は挙げられず、最後に先生が「北朝鮮に関する問題はすべてのアジアの人が考えなくてはならない問題である」という、メッセージを私たちに残して終了した。

最終日だったからなのか、開始が大幅に遅れた上に、多くの学生が本番中は居眠りをする有様であった。内容としては、タイムリーな話題である上に、開催国が韓国である分、皆で取り組む価値が十分あると思っていただけにこの結果は残念であった。

・ Cooking Time 文責：今村紀子

韓国人参加者数名と、韓国人以外の参加者で韓国の料理である Ttok Sanjok を作る。

場所：Ewha Womans University 近くのクッキングスタジオ

材料：韓国の餅、牛肉、にんじん、しいたけ、にらねぎ、油その他

調味料は予めクッキングスタジオのスタッフが合わせておいたため、AF 参加者は材料を竹串に刺すところからは始める。竹串にさす時、餅が壊れやすいので注意。上記の材料を全て刺し終わったら、見栄えがするように、はみ出ている材料を切る。その後調味料に漬ける。ある程度調味料に漬け終わったら、フライパンに油を引いて焼く。焦げ目がつかないように注意。焼き終わったら、火から出して竹串を抜いて出来上がり。

スタッフが予め用意しておいてくれた、「甘い、すっぱい、辛い、しょっぱい、苦い」の5つの味を持つ韓国の伝統的飲み物とともに、Ttok Sanjok をいただく。

<感想>

料理を通して、今まであまり話す機会がなかった人とも話すことができ、とても楽しかった。また、出来上がった物自体がとてもおいしかった。野菜炒めに似た味がした……。しかし、まず一つのグループの人数が多すぎた上、非常に簡単な作業しか行なわなかった為、料理自体に参加できる人が少なかったのが残念である。ほとんどの人が、ただ見ているだけという状態であったが、全体として楽しむことができた。



・ General Assembly 文責：高橋和裕

まず、evaluation では各々のテーブルディスカッションにおいてのまとめが発表された。なお、テーブル 1「兵役に対する良心的な不服と代替手段」は韓国人参加者のみであった。次に Governing Meeting において話し合われた事に基づいて各国の取り決め事を発表した。その中核を成すのが、Seoul Agreement である。

< 概要 >

- ・ International Board Cabinet
副代表、事務総長（ホームページ担当を兼ねる）、会計、広報の委員会、AAの委員会、実務研修の委員会を各国は設置する事
- ・ 次回の話し合いは、10月にタイ・バンコクで行われる ASEAN Conference にて行われる。
各国の代表者がサインをして終了。



Seoul Agreement に調印する各国代表者たち

・ Cocktail Time 文責：恩田晃一

International Conference Hall の外でドリンク（ワインとグレープフルーツジュースを混ぜて、りんごの角切りを入れたもの）を手渡され、立食形式で談笑しあった。この時今まで自分が特にお世話になった人たちに個人的にお礼を言ったり、自国から待ってきたお土産を渡したりと、ちょっと感傷的な1コマもありました。

・ 閉会式 & Farewell Dinner 文責：岸本康太郎

最終日の22日午後8時から、Closing Ceremony を兼ねた Farewell Dinner が開かれた。場所は、私たちが宿泊していた Seoul Women's Plaza の1階、International Conference Hall。立食形式で、名前を指定された8人前後1テーブルが、10テーブル用意されていた。今回の AF2003 のスポンサーの一つである Kim & Chang ローファームからは弁護士が2人、Senior Club という ALSA-Korea の OB/OG 団体からも10人強が加わる、大規模かつ豪華でフォーマルなパーティーとなった。

まず初めに、Kim & Chang ローファームの代表の弁護士の方からスピーチを頂き、さらに前日行われた Debate Competition の決勝戦に進んだ中国チームと日本チームのメンバーにはトロフィーが贈られた。その後、ALSA-Korea 代表から各国代表へお土産が渡され、会食となった。

およそ40分後、今度は各国代表から ALSA-Korea 代表へお土産が渡され、各国代表団ごとに記念撮影も行われ、最後に、ALSA-Korea 代表から ALSA-Korea の Organizing Committee と Board Member へ記念品が渡された。その後は、各人が最後の思い出にと記念写真をたくさん撮り、午後10時過ぎに Farewell Dinner は終了した。

個人的に最も印象的だったのは、最後に行われたホスト国代表から Organizing Committee と Board Member へのねぎらいであった。これは、外国人の私から見ても気持ちの良いものであった。それはおそらく、私個人の想いによるところが大きいのだろうが…。というのは、代表も Organizing Committee も Board Member もそのほとんどが、私と同じ3年生であり、2年前の1st AF、1年前の KC で出逢った人たちばかりだからである。2年前、お互い ALSA のことなんか何も分からなかった1年生同士、同世代の外国人と友人になったという、そのことだけで喜び、ただやったことといえば、ほとんど毎夜、飲みだ、屋台だ、カラオケだといっちは街に繰り出し、羽目を外したことだけ。そうした仲間が、海を越えて、でも ALSA という一つの背景でつながっている、だから仲間、もしくは同志と呼んでもいいかもしれないが、そうした仲間が、現在 ALSA の一つの核となって、こうしたすごい企画を創り上げ、活躍している、そしてその苦勞をお互い分かち合っている…。最後のねぎらいの景色は、私の目にはそう映った。私は想像する、いつか、そうした本当のねぎらいの輪、苦勞を分かち合う輪、その輪の中が国際的である日のことを…。そのときこそ、ALSA は最高の国際交流団体となっているだろう。



< 参加者感想文 > (五十音順)

石橋瞬人

AF では多くの発見がありました。自分の課題も多く発見し、この歳でしか体験できない貴重な体験をしたと思います。

まず自分の課題としては、自分の国の文化をもっと知る事、英語力を日常会話レベルから議論ができるレベルまで高める事、論理的に考えをまとめて話す事、法の基本的な知識を深めること等、いろいろな自分の課題を実感しました。

まずフリータイムでの、マニトや友達の自分の文化の知識が豊富だった事に驚かされました。自分は日本の文化を良く知らないため、自分が日本文化を紹介する立場になったら何も説明できないだろうと気付かされました。

テーブルとディベートでは、自分の英語力の低さと、議論を構成する力、それを支える知識が何も無い事を実感しました。日常会話なら問題ないが、複雑なテーマに関して自分の考えを英語で表現しようとしたところ、スムーズにでてこなかった事に驚きました。議論ができるような英語力を身に付けてようやく英語が使えると言えるのだなと気付きました。ディベートでは自分の書いたものが理解しにくく、しかも浅くて弱いものであり、今まで論理的に話す練習をしてこなかったという事と基本的な知識がまるで無い事を感じました。

これから除々にこういった課題に取り組むと共に、また韓国に行き、犬の肉を食べられるように韓国語を勉強していこうと思っています。食べ物も美味しかったし、友達もできて、韓国の文化に少しでも触れて、他の国々の人達と話ができた事は今後の大きな財産になると思います。ただディベートの決勝で負けたのは実力が無かったからしょうがないのですがなぜか妙に悔しいので、いつかリベンジしたいです。

井手健介

今回の AF に参加してみて一番良かったことは、自分に対する現状認識が出来たことと、これからはずっと、つながっていける友人が沢山出来たことであった。

前者に関しては、やはり海外の学生と対等に、そして、有意義に渡り合う為には、自分自身のレベルを上げなくてはならない。英語力ばかり、知識・経験ばかり、人間性ばかり。特に知識に関しては、自分の専門性がもっとしっかりあればテーブル中でも、より深く、広い議論が出来るのではないかと思うので、これらを今後の課題としていきたい。

後者に関しては、ST・AF と本当に素晴らしい友人と思い出を作ることが出来て本当に良かった。これこそが、まさに ALSA に入ったきっかけでもあるし、自分の求めているものである。これらは、ひとえに、相手、そして、自分自身に対して素直に交流した結果だと

思う。これからもこの気持ち・姿勢を大切にしていきたいと思う。

最後に、この企画と一緒に参加したみんな、それを支えてくれた方々、また、沢山の楽しい思い出を共有した海外の友人たち、そして、このような素晴らしい機会を与えてくれた ALSA に感謝の意を表したいと思う。「カムサハムニダ」(ありがとうございました)

今村紀子

今回の AF は、去年 AF に参加したときより自分がどう成長したのか確認するために参加した。去年の AF では何もできないまま、あっという間に時間が過ぎってしまったが、今年は当日、本当に少しだけ余裕を持つことができたかも。(やったね!!)

ただ、事前準備の段階はいっぱい、いっぱいだった・・・(ご迷惑をおかけしてすみませんでした)。Japan Trip のこともあったし・・・。でも、一年生の皆さんが AF に対してすごくやる気満々で、自ら進んで様々なことをやっている様子を見ると、「頑張らなくては」と励まされた。今回の AF ではあらゆる面において、一年生の皆さんに支えられた気がする。ありがとうございました。

AF ではいろいろな国の法学生と出会えて、話しができて本当に良かった。各国の法学生と、男性の好みから将来の夢まで幅広く語らい、また相談し、同じ時間、空間を共有できたことは本当にいい経験となった(私は内省的な人間だから、この機会を十分に活かせるかはわからないけど)。

恩田晃一

自分が Table Discussion に限らず今回の AF を通して痛感したのは「自分は本当につまらない人間だ」ということです。Cultural Night の越後屋の演技が好評だったり、ゲームの時にネタにされたりというのも、実力というよりキャラでなんとかしていたという感じがしました。その一番の原因はやはり英語力のなさや人生経験の浅さに尽きると思います。Table Discussion の時は自分の言いたい事が言えず、また話をふられても大したこと言えず的外れな事を言ってしまうかもしれません。「恩ちゃんの見聞が聞きたい」と思われるようになりたいです。そのためにはまず、目的ではなく手段としての英語を獲得してみんなと同じフィールドに立たなければなりません。あと、日本においてもいわゆる以心伝心的な表現ではなく、はっきりと万人が理解できるような言葉(ボキャブラリーのレベルの問題ではなく)で論理的な会話ができるように努めたいと思いました。Debate Competition のお手伝いをまったくできなかったことも申し訳なく思っております。自分勝手なことばかりで(特に最終日には井手さんをはじめ、参加者の皆さんにとってもご迷惑をおかけしました)何のお役にも立てませんでした。...とまあ、またまたお得意の自分勝手にネガティブな反省になってしまい、はたから見れば「行かないほうが良かったんじゃない?」

と言われそうですが、はっきり言って最高の経験をしてきました！ALSA じゃなきゃこんな経験できないっすよ。まさか自分がまだ悔し涙を流せるとは思ってもいませんでした。まずはこれから自分を磨き、ALSAにとって少しでも意味のある人間になりたいと思います！

岸本康太郎

ALSA にとっても自身にとっても3度目の The Asian Law Students' Forum。それは自分にとって、ALSA の原点を、そして自分という人間を再認識させるものであった。

ALSA を一言で説明するとしたら、何と言うべきだろうか？おそらく多くの人同様、私は、「法律を通しての国際交流団体」、そう答えるだろう。このワンフレーズの中に、キーになる単語はいくつも入っているが、最も重要な単語は「交流する」という動詞だと私は思う。なぜなら、交流するという活動内容、もっとラフに言えば仲良くなるというやりたいこと、があればこそ人は集まって団体をつくり、またその交流を充実させるために国際的なものにしたり、法的議論をしたりするのであろう。それに、そもそも動詞を抜いてしまえば、ALSA は何もやっていないことになってしまう。

いずれにしても、ALSA の一番の根本にあたる、交流する、人と接するということ。これがどうしてもなかなか難しい。しかし、こうして、もっと相手を知りたい、もっと相手と深く付き合いたい、そう願うとき、人はいろんな面で（人との接し方の面でも、学術面でも、その他の面でも）成長しようと思いつくのではないか。ただ、分科会などの学術面においては、やはり知識や慣れに左右されるところもけっこうあり、3年生ともなると多少（それでも多少だが...）余裕もあった。しかし、人との接し方の面は、学年差よりも個人差の影響の方が大きい。今回の AF では、自分の、人との接し方のまずい部分、特に積極性の面や相手を知ろうと努力する面が欠け気味であることをはっきり自覚させられた。いくつかの場面でそれを感じたし、全体的に考えても、もともと知っていた友人と話している時間が長く、今回の AF で新しくできた友人というのは少ない気がする。日本人でさえ一人の人間を知ろうとするのは大変なことだが、ましてや外国人、共通言語はあやしげな英語、異なった文化背景、このような状態でお互いを理解しようとするのは本当に大変だ。

そんな私でも、これまで ALSA を通じて知り合った海外の人の中には、腹を割って話せる本当の友人と言える人が何人かはいる。せいぜい5人、6人、そんなところだろうが...。そして、彼らも含まれるが他にも、仲間もしくは同志と呼べるような友人もいる。私が日本で ALSA をやっているちょうどこの時代に、海外で ALSA を一生懸命やっている人たちのことだ。企画や board の運営の苦労話をしているときなど、どこの国でも似たような状況が起こるのに気づき、私は彼らの後ろに ALSA という共通の影を見る。この影を見つけたとき、私は嬉しさを噛みしめながら実感する、普段はお互い考えもしないが、間違いなく ALSA の一時代を共に担っているのだということ。そして彼らと語る、いつの日か、

社会人として再び出逢い、今度は共に一つの企画を社会で創り上げてみたいと。これが、私が思う ALSA の原点であり、目標である。

黒石真那実

私はこの AF 全体を通して、自分がどんな人間なのかがまた少し見えた。プラス面においても、マイナス面においても。Debate Competition に出させていただいたお陰で、自身の知識量のなさ、理論立てる力不足、更には日常会話ではほとんど困る事のなかった英語力まで考えさせられた。議論する英語とは、また別な力を要するのだ。また、Governing Meeting に参加させていただいたお陰で、ALSA 全体が動く瞬間に触れられた。どのように中核の人間が考えているのか、何を目的としているのか。私自身が、ALSA 全体の事を本気で考え、議論に加わる良い機会となった。

たかが1週間、されど1週間。しかしなんて素晴らしい友達を作れたのだろう。最後の朝はお互いに何度も抱き合い、また会おうと言いつつ、目を赤く腫れさせてしまった。

当然の事なのかもしれないが、たった2週間前まで、私達はお互いに“stranger”同士であった。しかし日本に帰ってから何日も経ってないというのに、この淋しさや、いとおしさは何なのだろうね？PCでチャットをしながら、韓国の友人に尋ねてみた。

「That's ALSA!!!」

この友情を大切にしたい。そしてもっと深い話を語り合えるようになりたい、分かり合えるようになりたい。その為には、私は、全然勉強不足だ。日本が韓国に、中国に、台湾に、アジアに、何をしてきたか。それを知って、何を思うか。考えて、考えて、考えて・・・

とにかく、楽しかった。すごく楽しかった。寝不足も、今となっては良い思い出。AFと一緒にいった皆さん、行けなかった皆さん、本当にお疲れ様。素晴らしい時を過ごせて、とても幸せです。ありがとうございました。

染野好美

今回の AF は、ALSA の海外企画としては2回目で、海外経験としても3回目だった。大学3年生になっても、海外慣れしていなかったのが不安だったが、韓国で相談役のマニトが困らないように通訳などをしてくれたおかげで何事もなく過ごすことができた。むしろかなり楽しませてもらった。

文化交流などの企画を通してたくさんの友達ができ、マニトとは一緒に行動することが多くていろんな話をすることができ、かなり仲良くなることができた。今でもメールやメッセージなどで交流を続けていて、ALSA の企画ではなくて個人的に企画してみんなに会いに行こうという話まであがってきている。初めて参加した海外企画で出会った友達との再会も嬉しかった。ALSA の海外企画の魅力は海外に友達ができることが一番かも

しれない。とにかく楽しかった。ディベートも、それを通してお互いの考えていることを理解するということが友達の仲を深める手段の一つであったようにさえ思う。

とにかく楽しかった。ディベートの準備や飲み会で毎晩睡眠時間が少なかったが、それもいい思い出だ。できれば次回の ALSA 海外企画に参加してまたみんなに会いたい。

高橋和裕

私の大学生活の中で、最も感慨深いものになったのが、今回の A F であろう。実際は、かなりの苦難を強いられてはきたが、今思えば・・・

先ず、韓国に着いたら、ケアテイカー3人が出迎えてくれて、高速バスに乗せられて、初めて石焼ビビンバを食したが、非常に旨かった！なんだかんだで電車で移動（ソウル市内であればどの駅も約 70 円！）し、ソウル女性プラザに辿り着いた。

開会式を経て、テーブルディスカッションが始まって、私は、「性犯罪者の身上公開」についてのテーブルに就いた。英語で行われると言うことは既に解っていた筈なのに、発言することが出来なかった。準備は出来た筈なのに、本番になると、まごついてしまった。次の日からはっきりやろうと思っていたが、その思いが 2 日目に、裏目に出てしまった。

2 日目は、肯定側と否定側に分かれて実際にディスカッションを行ったが、内容は私が、日本語で問題提起したのと類似しているにもかかわらず、プライドばかりが先走ってしまって、仕舞いには泣き出してしまった。何とかこらえてディスカッションに望もうとすればするほど、悔しさがこみ上げてしまった。3 日目は考え方を変えた為、自分なりの意見も発言できるようになり、落ち着いてディスカッションに望むことが出来た。

この A F では、様々なパーティーや企画が行われていたが、一番心に残ったのは、やはり文化交流、Cultural Night であった。今までわが国は、準備らしい準備は何一つやれてなかったが、今回にいたっては別と言える。台本覚えたり、実際に動いてみたりする等、今までの日本に無い充実感があった。実際水戸黄門は、文化紹介の材料としては如何なものかと思うが、M1 グランプリも夢じゃないようなウケを与えることが出来たように思える。しかし、私はあまり動かない役だったので、ちょっと残念かなという思いは、120 パーセント残っていた。正直言って、暴れたかった。

韓国料理も色々食してきたが、キムチが毎日出たのは驚きだった。しかも味は日本のもの以上に濃厚で、韓国人のパワーの源をつくづく感じさせていた。クッキングタイムでやった串焼き、骨付きカルビ、冷麺、アサリ麺、海苔巻き、皆旨かった。（だけど、棗茶、大豆麺は微妙だった。）

General Assembly は、枠組みが具体化しつつあるので、進展が期待されるように思える。しかし、来年の日韓交流はどうなるのかは今のところ不明である。私としては関わりがもう絶たれてしまうのではないかと心配である。（引退した者が口に出すようなことではないと思うが。）

最後に、ケアテイカー、マニト、韓国AFスタッフ、私以外の協力してくれた全ての国内AFスタッフに敬意を述べたい。

野村洋介

韓国にいったらみないかと誘いを受けたとき、二つ返事で参加を決定した。もともと国際的な活動に興味があったのと、アジアという地域において様々な歴史的背景や文化的背景を抱えた日本がどう諸国と付き合っていくべきなのかを考えたいと思っていたからである。また私は海外にでたことが一度もなく、頭で想像するだけでなく実際に日本の外にいる人がどのような考え方をするのかを確かめたかったというのも理由の一つだった。

最初、私は各国の参加者がまるで違う考え方をし、日本に対し良くない感情を抱いているという先入観をいただいていたのだが、実際に話しをしてみたり、ディスカッションをしてみたりして、そうした考えは壊された。実に多くの場面で私たちは感情を共有できたのだ。楽しければ笑い、感動すれば泣く、これはごく当たり前のことなのだろうが、この単純な状況が私にとっては一番の驚きだった。(だからこそ浮かび上がる国ごとの違いも実感した。) また韓国を始め参加者はみな未来志向的であり、異なるバックグラウンドを持つ私たちがこれからどんな関係をつくっていけるのかについて真剣に討論できたことは貴重な経験になった。

このAFを通じて日本についてもっと知りたいという欲望、このままではいけないといういい意味での危機感、語学力の不足を感じることができた。

私は今回だけでアジアを理解したなどというつもりもないし、簡単に一般化もできないと思っているが、ただ集まって楽しい、に終わらない国際交流企画であると確信した。ALSAはまだまだ模索を続ける発展途上の団体である。この団体を通じて得られる経験、この団体の秘めている可能性は限りなく大きい。

福園茜

私自身AFに参加するという事は、去年のAFのSTAFFをしてから絶対に行きたいと思っていた企画でありました。

しかし、個人的な理由で日本を1週間も離れられなかったので、実際にAFに参加することができなかったので、すごく悲しかったです。せめて韓国に飛び立つみんなの補助が出来ればといいなと思い、国内スタッフとして渉外を担当しました。

今回初めての試みとして、全くコネクションのない法律事務所に対し渉外を行いました。が、なかなか思うように進行させることが出来ませんでした。法律事務所にとっても渉外を受ける事自体があまりないようでした。しかし、ALSAの理念に似たものをもつ法律家は必ずいると思うので、今後とも法律事務所に行なうことに意味はあると思います。

反省が多いAF準備でしたが、AF参加者が皆無事に帰国して充実した経験をいきいきと感想を持った姿を見られてスタッフしてよかったなと思います。

星野公哉

参加して本当によかった。JTとは違い韓国だけでなく中国や台湾、タイに友達ができうれしく思う。今後もこのAFで作ったいい関係を続けていきたい。

今回のAFで特に素晴らしかったのは韓国のスタッフたちだ。各国につくケア・テイカーや各人につくマニトなどゲスト国への配慮には感動した。マニトの制度のおかげで友達を作るという面でいい目標を作ることができた。また見ず知らずの韓国でゲストの意思を尊重し的確なガイドをしてくれたし、韓国について、日本についてなどいろいろなことを話すことができた。本当に感謝している。

A.A.に関してはハイレベルな学術を予想していたのに対し、実際にはその予想を裏切られる形ではあったが、同時にだからこそ見えてきた課題があったし、日本メンバー同士で話し合うことによってメンバー内の友好も深めることができた。

最後の夜に参加国が集まってゲームをしたり飲みながら話したりしたことはいつまでも忘れることのないいい思い出となるだろう。

最後に日本メンバーのみなさん、ありがとうございました。

守屋栄橘

今年のAFにおいて私は、『代表会でのALSA International Network構想の普及』と、『参加者全員の「納得」の行くAFの実現』が目標であった。

前者に関しては、事前に自己の意見をきちんと文章化して送るとか、主催国韓国に配慮して意見を発信するとかが功を奏し、自分のモットーである『信義』を大事にできたこと。また、議長が非常にフェアな態度であり、英語表現に若干不自由するこの日本代表の意図を汲んで議事を進めてくださったこと。そして何をおいても、各国の状況や、現状の相違に拘泥されることなく全ての代表者が、自己の信念に基づいて議論をしてくださったこと。それらを通して、代表者会議が実りあるものになり、今後のALSAの発展に大いに寄与することになったことを嬉しく思う。

後者に関しても、同時期の他の企画への準備をしながらも使命感を持って事前勉強会を企画してくれた今村さんのもと、一年生全員がTCをやり、歴史問題等にも触れることができ、これまでにない意気込みでAFに向かうことができた。それが何より良かったと思う。文化紹介の劇『水戸黄門』に関して後の世代の会員が見れば、まだまだのものであるかもしれないが、現状としてALSA JAPANとして各国の参加者に見せられる最上のものがあったと確信している。『参加者が納得する』企画とは、参加者の思い入れと、準備があっ

たこそそのものなのだと思う。直前合宿等も含めて、私のわがままを通させてくれた副実行委員長の二人を始め、全てのスタッフに感謝をしたい。

しかしながら、当初の予想や期待に比べそれ以上に私にとって衝撃的であったのは、ホスト国・韓国をはじめとして、各参加者の国際性の高さである。国際性とは、自分の国の考え方や主張にとらわれずに、多様なあり方を認識し、なおかつそこで自分の意見を言える人間のことであると思う。その意味で、今回のフォーラムが多くの参加者に楽しめるものであったのは、何も日本に限ったことではなく、この ALSA の全体の雰囲気として、一種の国際性がはぐくまれているからであると信じている。

問題点は多々あるが、過去の 3 年の AF を見て今回ほど楽しかったフォーラムはない。全ての関係者に感謝の意をささげたい。

吉尾真貴子

今回の AF は 3 年次である私にとって ALSA 海外企画に参加する最後の機会であり、また同時に初めての海外だったこともあり、非常に思い出の深い企画であった。しかし、私が AF のなかで 3 年生らしく最後の企画らしく振る舞えたか、ということそれはそれほどでもなかったかもしれない。しかし自分に欠けている点を目の当たりにすることで自分を見つめ直すよい機会になり、その意味でも AF は私にとって意味のある企画になった。

また、今年の AF に参加して、特に去年 AF で会った Korea のメンバーが組織の中心となって AF を運営しているのを見て感慨深いものを感じた。また、これからの ALSA を担うべき多くの新入生たちとも接することができた。きっとこの AF を通じて彼らも ALSA に対する思い入れを強くしてくれたのだと思う。私は今回の AF のなかで、ALSA の将来の可能性を感じることができた気がする。おそらく最後と思われる海外企画でそれを感じることができたのはとても幸せなことだと思う。

< 参加者一覧 >

- 実行委員長 : 守屋 栄橘 (早稲田大学法学部 3年)
- 副実行委員長 : 高橋 和裕 (東海大学法学部法律学科 3年)
井手 健介 (中央大学法学部政治学科 2年)
- 学術統括 : 今村 紀子 (中央大学法学部国際企業関係法学科 2年)
- 会計 : 吉尾 真貴子 (中央大学法学部法律学科 3年)
岸本 康太郎 (早稲田大学法学部 3年)
染野 好美 (東京国際大学国際関係学部国際関係学科 3年)
黒石 真那実 (早稲田大学法学部 2年)
石橋 瞬人 (中央大学法学部国際企業関係法学科 1年)
恩田 晃一 (中央大学法学部国際企業関係法学科 1年)
野村 洋介 (早稲田大学法学部 1年)
星野 公哉 (中央大学法学部国際企業関係法学科 1年)
牟田 努 (早稲田大学法学部 1年)

< 現地スタッフ >

- 渉外担当 : 福園 茜 (中央大学法学部法律学科 3年)

The 3rd Annual Law Students' Forum in Seoul 2003
報告書

発行月	2003年10月
発行	The Asian Law Students' Association Japan
編集責任者	井手 健介
印刷	創美舎
